7. 『 秋田・青森 縄文 の ストーンサークル 』探 訪

- 縄文人の心を考える　これも　iron road -

oyu0print.htm　2000.11.1.　by　M.Nakanishi

秋田県 鹿角市	青森県　青森市	青森県 青森市	秋田県 鷹巣
大 湯 ストーンサーク	小 牧 野 遺 跡	山 内 丸 山 遺 跡	伊 勢 堂 岱 遺 跡

【　内　　容　】

1. 縄文の心を考える　これも「Iron Road」

2, 縄文のストーンサークル

　a. 「大湯　環状列石群　野中堂遺跡 & 万座遺跡

　b. 青森市　小牧野遺跡」探訪

　c. 山内丸山遺跡の「ストーンサークル」と「墓の道」　探　訪

　d. 「伊勢堂岱遺跡のストーンサークル」探訪

3. 「縄文人の心を映すストーンサークル」

4. 岩木山北山麓　鬼伝説の郷から　縄文人へ

7.1.　縄文のストーンサークル　これも Iron Road

この夏　東北芸術工科大　赤坂憲雄教授の講演「縄文人の心を表すストーンサークル」の話に感激。是非その現場に立ちたいと 8 月「秋田大湯の縄文のストーンサークル」を訪ねたのにつづいて、9 月この山内丸山遺跡お月見の会訪問を機会に秋田鷹巣の伊勢堂岱遺跡・青森小牧野遺跡そして一番古い山内丸山遺跡のストーンサークルをも見てきました。
静かな森の中、縄文人の心に触れたいと誰もいない遺跡の中にどっぷり浸かって帰りました。

【青森・秋田　縄文のストーン　サークル】

青森山内丸山遺跡　青森小牧野遺跡　　秋田県鷹巣　伊勢堂岱遺跡　　秋田大湯
野中堂・万座遺跡

津軽・秋田の鬼は「産鉄の民」。
「津軽の赤鬼」「ねぷた」を象徴する「赤」も縄文から繋がる「赤」のながれでは・・・・。
何の根拠もないが、心情的に東北に惹き付けられ、せっせと東北がよい。山内丸山のあの櫓を赤に塗ってとイメージしている人達も知りました。 発想が根拠を引出してくるのでは・・・・・・。
弥生人が鉄を手にして　なんて考えなくても　あの縄文のストーンサークルを絆として、平和に暮らしていた人達が或日　鉄を手に入れて・・・・・・・。
そこから　時代が激動の世に変化して…・そして人間観も変わってきて・……。
「ストーンサークルが縄文人の心・人間観を映すのなら　鉄が弥生のそしてその後の日本人の人間観を強引に変えて行ったか・・・・・」。 これも時代を介して流れる日本の「Iron Road」。
青森から秋田に広がるストーンサークル・縄文とその後の弥生・産鉄の民遺跡その重なりが日本人の精神構造・多様性の源泉は・・・・・・
「たたらの民」を描いた映画「もののけ姫」の舞台　白神山地が日本海に落ち込む五能線の荒々しい海岸を眺めながらそんな事を考えていました。

五能線　秋田・青森県境海岸　　世界遺産　白神山地

― 五能線の中から　秋田・青森県境の荒々しい海岸を眺めつつ
2000. 9. 17. 夕　by M. Nakanishi

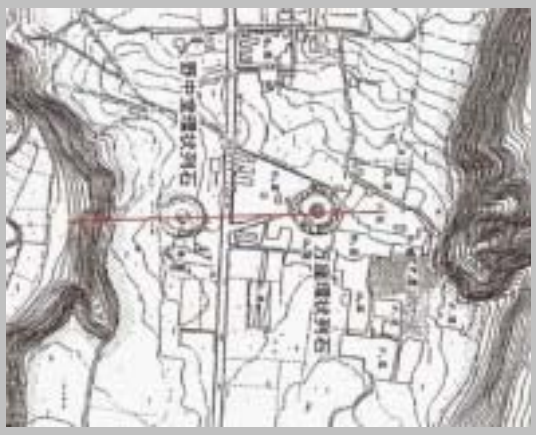
7.2. 縄文のストーンサークル　walking

A. 『秋田県鹿角市　大湯　縄文のストーンサークル探訪記』

『野 中 堂 遺 跡』 と 『万 座 遺 跡』

oyu1.htm　oyu2print.htm

2000.8.4. by M.Nakanishi



7月の初め、東京で「東北学」を提唱する山形芸術工科大学の赤坂憲雄教授の講演の言葉に深く感銘を 受け、是非とも、大湯縄文のストーンサークルの場に立ちたいというのが、今回のwalking目的の一つ　だった。

「東北を理解するには縄文のストーンサークルに立たねば…」とちょうど「津軽ねぷた」にも抱いていた一種あこがれにも似た気持ちで 、まぶしい太陽が照りつける夏の午後　秋田県鹿角「大湯環状列石群ストーンサークル」を訪れた。　　2000.8.4.

「穢れ」を知らぬ縄文人・「戦いのない」縄文人のメッセージ。

「縄文人の心を映すストーンサークル」縄文人の意識・人間観が縄文の村の形態を生み、この「縄文のストーンサークル」を作った。

「日本人のやさしさの痕跡がここにあるのではないだろうか…」

また「東北の風土がこれを起点にしているのではないか…」

2000. 7. 7.　赤坂憲雄氏　山内丸山縄文発信の会　東京・縄文塾講演から

1．弘前駅から奥羽本線特急に乗って大館へ

列車は奥羽山脈山脈の中に分け入り、約 1 時間で大館につく。「大館で花輪線に乗換え十和田南へ」と考えていたが、都合の良い列車無し。特急が留まる駅とはいえ、駅前は本当に閑散としている。時計が止まって一切がストップしているような何とも不気味な感じ。
大館といえば、「秋田まげわっぱ」の中心都市と考えていた私は本当に戸惑った。後で判ったが,街の中心は駅から南へ川を渡った新市街地に移っている。 国鉄の駅ではなく郊外や駅ではないショッピングモールなどを中心に展開する新市街地に今の日本の都市の縮図を見る。それが、本当に地方へ行くほどはっきりしている。駅から 500m ほど先にバスセンタを見つけ、そこからバスで鹿角花輪駅へ行く事にした。 それでも約 1 時間待たねばならない。

【鹿角花輪盆地と米代川　ストーンサークルにはこの川の上流側支流の河原石が使われた】

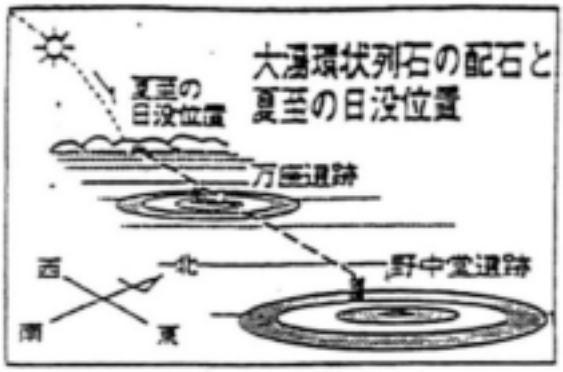
2.　大館から鹿角花輪駅へ

バスは米代川沿いに奥羽山脈の中に分け入って行く。交通の便から言うと本当に山奥である。
南側は八幡平の山々　北側は十和田湖や八甲田の山々に挟まれた花輪盆地の中心に鹿角市がある。そして、この盆地の中、花輪線十和田南駅や鹿角花輪駅から十和田湖へ上がって行く途中の高台に大湯ストーンサークルがある。
能代川は大河である。奥羽山脈の中に曲がりくねりながら川と並行してバスは進む。 あちこちでアユ漁をしている多くの人達の姿が、まわりの山々の景色とあいまって美しい。自然が主役。そんな中へどんどんバスが入って行く。最も鹿角市 JR 花輪駅近傍は八幡平や八甲田・十和田などへの中心基地として大きな新市街が展開されていた。
恐らく新しいスタイルの観光都市に見えた。
花輪駅からタクシーで約 15 分。市街地を抜け、八甲田の山々へ向かって幾つかの丘陵地を登った高台が「大湯ストーンサークル」であった。 午後 3 時。雲があるが、真夏の太陽が西の空に輝いていた。

縄文のストーン　サークル
3.「大湯　環状列石群　野中堂遺跡 & 万座遺跡」
oyu5.htm

【中 堂 遺 跡】　　【 万 座 遺 跡 】

広い草原の中、北へ八甲田の峰に向かって真っ直ぐ伸びる一本道を挟んですぐ、両側に整備された万座・野中堂の縄文遺跡がある。 写真で見なれた日時計状列石と二重の環状列石が配された野中堂遺跡がすぐ傍にあった。 道をへだてて、反対側は広い草原であり、その中には沢山の石が環状に配された大きなストーンサークルがある。
このストーンサークルの向こうに復元された幾棟かの住居が見え、ストーンサークルを中心に広い緑地公園として、整備されている。また、道を隔てて存在する野中堂遺跡では、ストーン サークルの周辺部の発掘調査が進行中であり、竪穴住居跡の存在が期待されているが，まだはっきりしない。
この野中堂遺跡と万座遺跡のストーンサークルの中心やストーンサークルのシンボル日時計状列石はほぼ一直線に並んでおり,この直線上の先に夏至の太陽が沈むという.
早速野中堂遺跡の日時計状列石の後ろにまわって、両遺跡が一直線に並ぶ位置に立って見る。
夏至ではない今の時期では太陽の位置と両遺跡が並ぶ位置とは随分離れているようだ。
しかし,縄文人が太陽の運行をきっちり知っていたというのは事実らしく、現代と縄文時代の地軸の傾きの補正等を入れるとほぼこの仮説は正しいという。



どちらのストーンサークルも内帯・外帯二つの円環状の列石があり、この帯の間にストーンサークルのシンボルと言われる一組の日時計状列石が空に向かってそそり立つている。また、ストーンサークルの環状に積まれた列石は　平面で見ると漫然と並べられているようにみえるが、どちらの遺跡もきっちりとした石組を有し、この石組の下からは墓が発掘され，西北西を向いて整然と埋葬されているという。これらストーンサークルの外側には四本柱の建物そして竪穴式住居が取り囲んで整然と建っていたという。
縄文人達は米代川の河原から大量の石をこの丘に運び上げ、この集落の中心にストーンサークルを作り、集落の村人が死ぬとこのストーンサークルで石組みの墓を作り、弔い祭りを行なったに違いない。おそらく村中総出であったろう。
　「死者と共に暮す生活意識」これが、縄文人の特徴ある人間観といわれる。この草原の一角にすわり、かつて在った縄文の村と暮しをイメージする。このストーンサールは何をイメージし、何を今に語りかけているのか??? 色々の事が頭によぎるが、よく判らない。遠く山に囲まれた森のなかで、ストーンサークルを中心に自然と調和して、穏やかに暮す森の民・集団があった。それが日本人のルーツ。

4．縄文のストーンサークルの地に立って

ストーンサークルは何を示しているのか　考えるのは勝手。
実に気分壮快な午後になりました。
このストーンサークルの前に座り、まわりを眺めているこの気分が日本人気質の第一歩。なにか日頃の喧騒から逃れた気分がそうさせるのか実に気持ちが良い。墓場にいるというと暗い印象を想像するが、全くそんな気持ちも無し。山々に囲まれた草原の上で自然を満喫。 ついでながら，また、この草原で一人の若者に出会いましたが，「神戸から来たと……」
グルット見まわしても 10 人の人影も見えぬこの奥羽山脈の奥　神戸から遠くはなれたこの鹿角の地に神戸の 2 人が入る。全くの偶然であるが，人の動きとは面白い物である。 また、逆にこのストーンサークルには人を惹きつける何かがあると観じた次第。
一度ここに 1 日座っていて、訪れる人達のに「何を求めて　何処から…」と尋ねて見たら面白いと思う。
日本人の奥にある何かが見えてくるかもしれない。
「死者と共に暮す」との生活感覚は本来キリスト教など一神教にある感覚といわれる。
多神教ではあまりない感覚といわれる。仏教・神教「ヤオヨロズノ神」の日本の底にまた別の感覚がある。まさに日本そのものの多重性。そんな中にあって「ねぷた」そしてこの「ストーンサークル」 また「いたこの口寄せ」といい、何か日本人の琴線にふれるところが東北にはある。
精神的な日本人の気質形成の場に古くストーンサークルが一役買い、根強く今に生きていると考えたい。
歴史民俗博物館の辻誠一郎氏のいう「日本の多様な植生がそこに住む日本人の多感多様な気質を育んだ」とすれば、その生活の場としてのストーンサークルが「縄文の生活を通して日本人のやさしさの気質を育てた」のではないだろうか　??
大河米代川を遡り、奥羽山脈の奥深く　白神・八甲田・八幡平の山々に囲まれた花輪盆地の高台の草地にすわりこんで、ぼんやりと一人暮れ行く自然の風景を眺めていると縄文の時代にタイムスリップして、ゆったりとした気楽な気分になる。
何を考えるでなく、約 30 分　万座遺跡の広大な草原にすわってストレス解消の精神浴でした。

この遺跡の草原では今、当時の樹木が沢山植えられ、縄文の森が育てられている。2,3 年先　さらに 10 年近くを必要とするかも知れないが,くり林など深い森に囲まれて、ストーン　サークルを中心に復元された竪穴住居が立ち並ぶ縄文の村が静かに待っているかもしれない。
残念ながら、雲が出て　夕日の沈むのをみることが出来なかったが、暮色が深くなって大湯のストーンサークルから、バスで鹿角花輪駅へ。そして　高速バスで盛岡へ。

気分壮快。初めて見た「山々をバックに立つ日時計状の列石と環状列石群」さらには「津軽岩木山山麓

の原生林の鬼とネブタ」が「静」と「動」として頭の中で駆け巡っている。
奥羽山脈の奥地から流れ出した大河米代川沿いの流域・大湯にも、時代が下ってくると弥生の人が住み、そして「たたら　鉄」の遺跡があるという。
「山が人を呼ぶのか　川が人をゆぶのか　山川あるところ人有り」　「IRON ROAD」がここにも通っていました。

2000. 8.4. 盛岡からの新幹線の中で by M.Nakanishi

縄文のストーンサークル　walking

B.　「青森市　小牧野遺跡」探訪

kmkinoprint.htm 2000. 10. 1. by M.Nakanishi

【 青森市 小牧野遺跡　縄文のｽﾄｰﾝｻｰｸﾙ 】

1.「青森市 小牧野遺跡」縄文のストーンサークル
2.「青森 小牧野遺跡」解 説小牧野遺跡紹介文より　青森市教育委員会資料抜粋

【青森市　小牧野遺跡　その概要】

1.「青森市 小牧野遺跡」 縄文のストーンサークル walking

小牧野遺跡近傍

小牧の遺跡の位置

小牧野遺跡入口の道標

9 月 16 日　早朝　タクシーで小牧野遺跡を訪ねた。
街の人に聞くと「あそこはバスもなく、車でないと行けぬ」と言われたが、後から考えると丘の下まではバスが走っている．【もっとも　2 時間に 1 本程度で便利の悪いことには変わりなし．】
青森の市街から八甲田に向って　タクシーで約 30 分。青森空港のある丘陵と一つ西側の丘陵で、もう青森の市街から外れ、南へ八甲田の酸湯へ向う山裾の丘陵地に小牧野遺跡は存在する．
荒川と入内川に挟まれた丘陵地で、背後に大きな八甲田の山々が見える．　野沢の小さな集落で、酸湯へ向う幹道を離れて，人里をから林の中の丘陵へと続く一本道を登り、丘陵へあがったところ一面の畑が続く中に小牧野遺跡への標識があり、その向こうに小牧野遺跡の森が見えた．
早朝朝 7 時すぎの朝靄の中を一人誰もいない小牧野遺跡の中に足を踏み入れると、山内丸山遺跡の人の列が嘘のように静まり返った森の中に凄い量の石組で作られたストーンサークルが眼に入ってきた．
大湯や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルが平板状にストーンサークルが形成されているのに対し，周辺の樹木に包まれて、その特徴ある石組みが少し傾斜をつけて土地を掘り込み、立体的に立て掛けた状態で円環が続いている．

国史跡小牧野遺跡の石碑

日時計状列石

二重の円環の石組　　小牧野式石組

円環の右の方には日時計状列石〔山内丸山の岡田康博先生「はひまわり状」という〕が本ストーンサークルの象徴として立っている．ストーンサークルの日時計状列石の右側の周辺部は林になり、丘陵地の崖となって下へおちこんでいるのであるが、この林の中に多数の土坑墓が発掘されていた。
朝靄につつまれ、このストーンサークルの中心にひとり立っていると朝霧がその幕となって「これから始まる一大古代激」を桟敷で待ちうけている感じがしてならなかった．
恐らく　古代には、幾つも並ぶこの丘陵地の何処かで、まだ見つかっていない集落の人達が、八甲田の山を背にこの小牧野のストーンサークルを毎日眺め、葬祭の時には　幾つもの兄弟の村の人達が一同にこのスーンサークルにあつまり、弔い、お互いの絆を確かめあったに違いない。環境の変化で大きな集落が維持できなくなり、分村する時にこのストンサークルが現われてくると言われている。
「　このストーンサークルの各位置が元の村の円環の集落の居住位置を現わしているとしたら、
　　このストーンサークルに自分の定席があり、それが天空・宇宙においても定席があるとしたら．」
自然発生的に円環にこだわった縄文人がそこに自分達のステイタスを見出して行ったのではないだろ

うか…・・
だとしたら　あの小牧野式と呼ばれる列石の配列もそれぞれ個性があるはず …・・

もうここまでくれば妄想かも。
野球や映画の開始前の期待に満ちたあの想像・あのイメージのふくらみ……・・
「霧がはれ，もう幕があくかな…・」とゆったりとした落ち着いた気分の早朝 walk でした

ストーンサークル

朝靄のストーンサークルを背に

日時計状列石

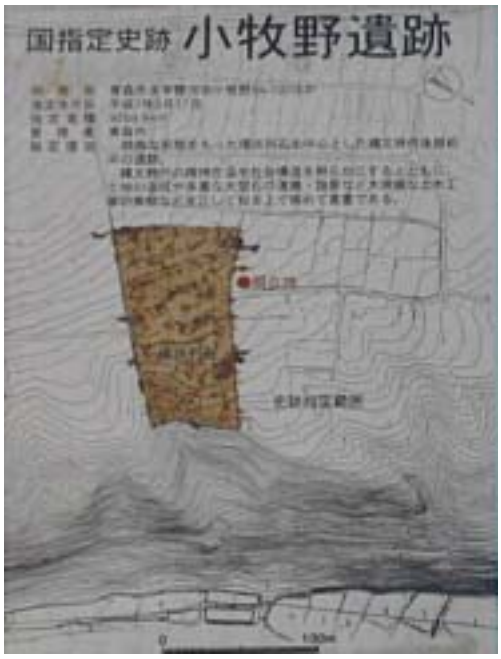
縄文のストーンサークルは墓場と関係しているが、全く暗さなし。
現代の都市にある公園墓地がそれまでの寺などに隣接した暗い墓場のイメージ゛を払拭しつつあるのも広く考えれば現代のストーンサークルか?
昨日見た山内丸山遺跡の林の中のストーンサークル形成の原型なども重ねイメージをふくらませながら、林の中の丘陵地を野沢の集落までゆっくり下り、バスで青森へ。

2000．9．16．早朝　青森　小牧野遺跡で　　M．Nakanishi

資　料

青森市　小牧野遺跡　－ 青森市教育委員会資料より抜粋 －

aokmkinoprint.htm　by M.Nakanishi　2000.10.1.



小牧野遺跡は青森市野沢字小牧野に所在し、今から約４，０００年前の縄文時代後期前半に作られた環状列石を主体とする遺跡で 1995 年には国史跡指定を受けている。
勘定列石は、こぶし大から 50?60cm 位の大きさの河原石を用いて作られた直径 3m の中央帯、29m の内帯、35m の外帯の 3 つの輪からできています。
内帯と外帯は細長い石を縦に、その両側に平らな石を 3?6 個積み重ね、これを繰り返すことによって形作られており、その石の総数は 2､000 個にもなります。
この配列は「小牧野式」と呼ばれる特徴をもっており、これらの石組み配列の下には墓がなく、ストーンサークルの石組みの下に墓がある大湯のストーンサークルとは異なっいます。

【朝霧の中の小牧野遺跡　ストーンサークル　2000.9.16.　朝】

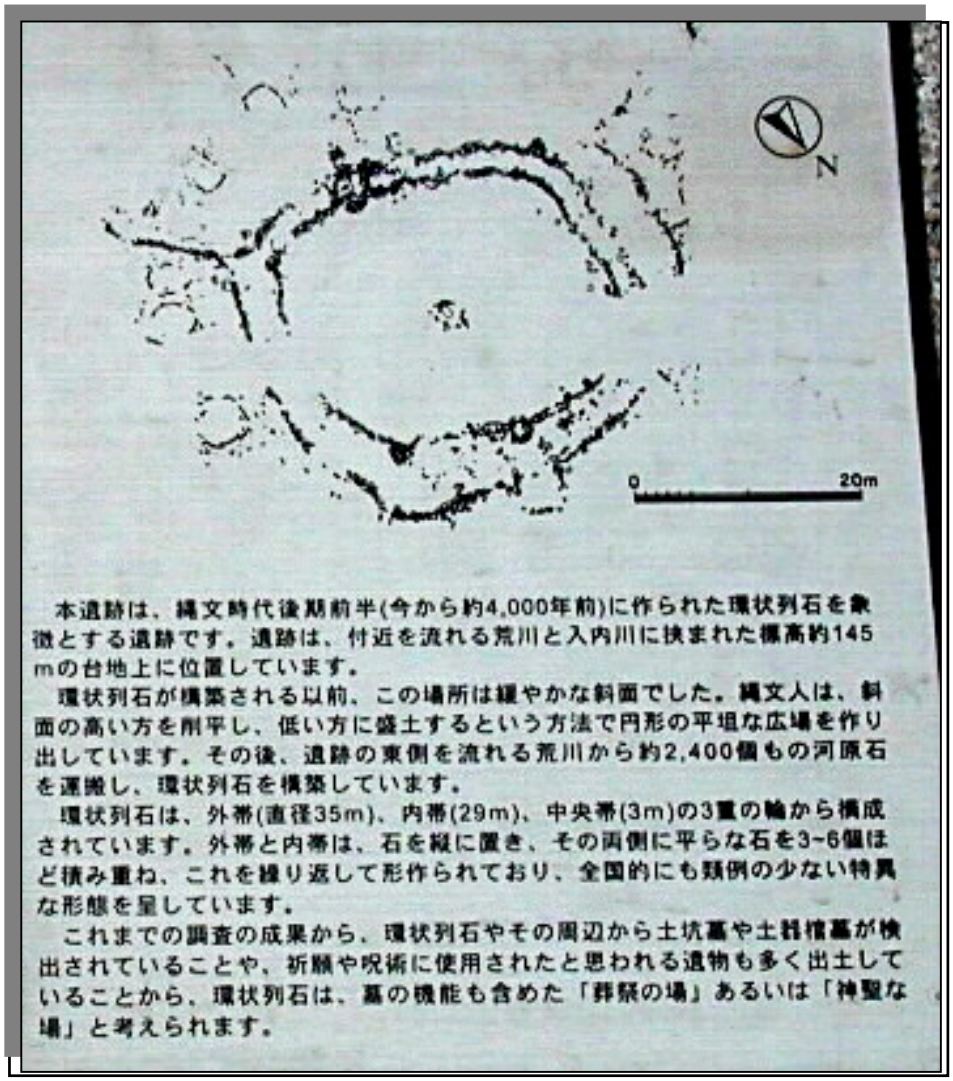
【　特徴あるストーンサークル円環の列石　小牧野式列石　2000.9.16.　】

調査は今もつづいていますが、これまでの調査によると、周辺部には環状列石を形成してきたと考える集落の存在はもとより、列石構築期の 竪穴式住居跡の存在も確認されていません。また、環状列石の周辺からは、土坑基群（墓域×食料貯蔵用の土坑群（貯蔵施設)、遺物の捨 場が検出されています。〔周辺の貯蔵施設は、列石を作っている期間やそこを使用、管理する期間に必要とした食料貯蔵施設であり、捨て場はその時に廃棄されたゴミ処分場であったと推測されている〕

これらの事やから祈願や呪術に使用されたと思われる遺物も多く出土していることから、環状列石は、墓の機能も含めた「葬祭の場」あるい は「神聖な場」と考えられています。

このストーンサークルは傾斜した台地を造成して平場を作り出した後に作られています。どのようにしてこの土木工事が行われていたのかも興味深いところです。
また、この遺跡からは朱塗りの土器や土偶なども発見されています。
このストーンサークルの謎を追って小牧野遺跡では現在でも調査が続けられている。

【ストーンサークルの周辺部　森の中で続く発掘調査　2000.9.16.】



本遺跡は、縄文時代後期前半(今から約4,000年前)に作られた環状列石を象徴とする遺跡です。遺跡は、付近を流れる荒川と入内川に挟まれた標高約145mの台地上に位置しています。

環状列石が構築される以前、この場所は緩やかな斜面でした。縄文人は、斜面の高い方を削平し、低い方に盛土するという方法で円形の平坦な広場を作り出しています。その後、遺跡の東側を流れる荒川から約2,400個もの河原石を運搬し、環状列石を構築しています。

環状列石は、外帯(直径35m)、内帯(29m)、中央帯(3m)の3重の輪から構成されています。外帯と内帯は、石を縦に置き、その両側に平らな石を3~6個ほど積み重ね、これを繰り返して形作られており、全国的にも類例の少ない特異な形態を呈しています。

これまでの調査の成果から、環状列石やその周辺から土坑墓や土器棺墓が検出されていることや、祈願や呪術に使用されたと思われる遺物も多く出土していることから、環状列石は、墓の機能も含めた「葬祭の場」あるいは「神聖な場」と考えられます。

青森市では、今後この小牧野遺跡を、発掘調査の成果をもとに、縄文人の世界観を視覚的に理解できるような遺構や縄文時代の植生等を考慮した環境などを復元し、当時の歴史や自然の一端を肌で体験できるようなｒ史跡公園」の整備を目指しています

縄文のストーンサークル」の原型

C.　山内丸山遺跡の「ストーンサークル」と「墓の道」　探　訪

snsnnaiprint.htm　　2000.10.15. by M.Nakanishi

青 森 山 内 丸 山 遺 跡 と 「 墓 の 道 」

1．岡田康博先生の見学会

2．「日時計状石組」」

3．「ストーンサークル

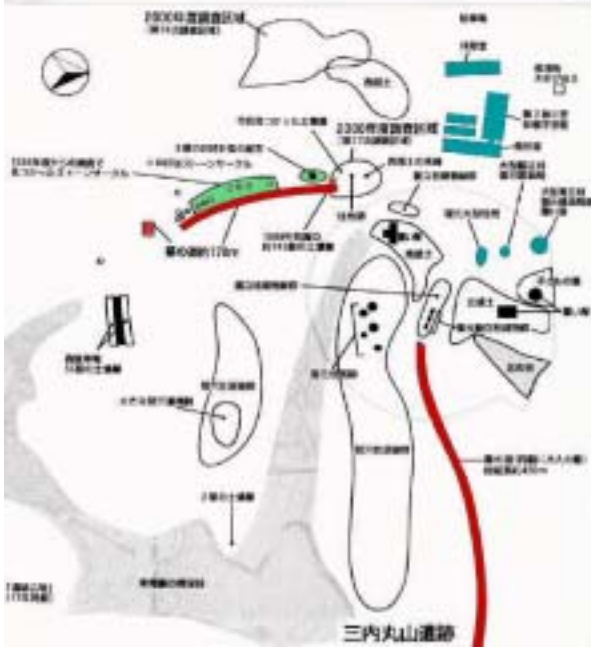
4．「墓の道」

縄文中期の巨大縄文遺跡　青森市「山内丸山縄文遺跡」。その発見は今までの日本の縄文観を変えようとしています。
縄文人の心・人間観を映すと言われる「縄文のストーンサークル」。
山内丸山遺跡にもその原型といわれる「ストーンサークル　環状配石墓」があり、岡田康博先生の案内で見学することが出来ました.

10.15.午後山内丸山遺跡にて

1．三内丸山遺跡岡田康博先生の見学会

山内丸山の集落から東に伸びる「縄文の道」が既に発掘調査され，その道の両側には土坑墓が並び縄文の「墓の道」である事が明らかになっている．
この「縄文の道」とは別に山内丸山の集落の中心部から南へ伸びるもう一本の縄文の道が最近発見されている。
この道も「墓の道」でその周辺からは土坑墓が多数発見されると共に、伊勢堂岱遺跡や小牧野遺跡等に見られる縄文のストーンサークルの原型というべき環状配石墓が幾つも発見された．
今回の山内丸山遺跡訪問の目的は、昨年に続いて山内丸山遺跡の中で「縄文の月見の宴」に参加することと縄文のストーンサークルの原型となった山内丸山遺跡の「ストーンサークル」を見ること。



東西に伸びる「墓の道」とｽﾄｰﾝｻｰｸﾙ

9.15.午後　この山内丸山遺跡の岡田康博氏の案内で 2000 年に新たに調査されているところとその中心にあるストーンサークルのある「縄文の道」を案内してもらった．
発掘者である岡田先生に直接発掘の様子と共に縄文の人達の生活・墓場のイメージなどを直接聞けた事は本当にラッキーでした．
2000 年の西盛土の端部発掘調査区域で住居跡の調査が進められたが，その住居跡のすぐ南側から多数の土坑墓が密集して見つかっている。そのすぐ横のところから南へ縄文の道が伸びている．
また、この道の入口に近いところで日時計状の組石が 3 基みつかり、更に今は登り勾配の林の中に続くこの「縄文の道」を入って行くとストーン サークルが幾つも見つかっている．そして　更に遺跡の端までこの道は続いている。
集落から東西に伸びる道と同様性格的には「墓の道」である。この端のところで縄文のこの道の断面が見られた。

山内丸山遺跡と「墓の道」の位置

集落から墓場を南北に伸びる黄土色の「縄文の道」が貫いている．その道の入口の所には幾つもの土坑墓・板囲いの墓に囲まれて日時計状の　　組石があり、この墓の道を登って行くと木立の中に山内丸山遺跡のストーンサークルがひっそりありました。

岡田氏は縄で区切られた中の青いカバーのかけられた発掘部にみんなを招き入れ、「ひょい」とカバーを開けて、本当にまじかで発掘された部分を丁寧に発掘の意味をはなしてもらった。
黄土色した縄文の地層と黒のそれ以後の地層のﾁｮｯﾄした違いを かぎわけ、立体の形を掘り起こし、縄文の遺物を浮かび上がらせて行く。
縄の外からは見えない「土器のかけら」　土の色の違いで見分ける「土坑墓の穴」など見過ごしてしまうところが足元にある。
こんな真近で次々と発掘の中を自由に見学・解説してもらたことはなかった.

つい先だっても、ある遺跡で　「縄の中にはいるな」「外からでも、写真とるなら事前に教育委員会で許可もらってこい」と本当に「遺跡はだれのもの・・」と疑いたくなる経験した後だったので、この岡田先生の見学会にはビックリ 。山内丸山遺跡に繋がる人達　本当は皆さんえらい学者さんなのでしょうが、同時に一般の人の考えも貪欲に吸収し、新しい視点で考えるとい
った姿勢　山内丸山遺跡研究者の気風と聞きましたが、岡田先生はそんな気風を作ってこられた中心人物。 市民参加型のイベントが次々行なわれている遺跡・「遺跡から月見をして縄文を考えよう」などちょっと遺跡に繋がる学者の発想とは違う良さ。それが山内丸山遺跡にはあり、一般人である私など、訪れるたびに、親しみの中に、新しい発見とエネルギーを得られる原因。
ちょっと感傷的に「縄文のストーンサークル」を捉えていた私でしたが、今回の見学会で岡田先生からストンサークルを眼前にして縄文の中味の中味を間近で解説してもらったことで、新しい視点がぼくにも出来ました。ほんとラッキーでした。
市民や一般の人も参加できるこの山内丸山遺跡にその中心となる「縄文研究のナショナルセンター」が早くでき、新しい発想の中で、新しい縄文感がきずきあげられることを強く期待しています.

2000.9.15.　中 西 睦 夫

2. 「日時計状配石」　(ひまわり状配石)

snsnnai2print.htm

日時計状配石
真中の棒状の石がサークルの中心に立っていたと推定されている。

西盛土の端　住居跡・土坑墓等発掘現場
(左端に青いシートがかけられているあたりが日時計状配石が見つかったあたり)

西盛土の末端の西側に広がる住居跡の発掘調査が推進されているがその地域から多数の土坑墓がみつかった。兆度南側に広がる丘の裾のあたりである。当初　このあたりも住居跡が発掘されるとかんがえられていたが、思いもかけず、多数の土坑墓や板囲いの墓が発見され、ここを通って南北に伸びる「墓の道」が南の丘に向って斜面をのぼっていく。 この登り口のところに日時計状石組が発見された。兆度山内丸山遺跡の集落から墓場に入る入り口あたりである。

岡田先生はこの配石を「日時計状配石」とは呼ばず、「ひまわり状配石」と呼ぶ。言われて見ると其の方が近いとも思える.真中に少し他より大きな細長い石が見えるが、配石の真中に立っていたものと思われる.ここでは 3 基の日時計状配石が見つり、山内丸山遺跡の勢力が最も強かっ
た縄文中期 5000 年 4500 年前のもの。
この山内丸山遺跡の時代に続く縄文後期には大湯や伊勢堂岱遺跡・小牧野遺跡にみられるような大きなストーンサークルがあらわれれ、ストーンサークルにアクセントを添えるがごとく、この日時計状配石が円環の傍に一基立っている。

山内丸山遺跡のような巨大な縄文集落が形成された縄文後期に続く時代に、これら巨大集落は小さな集落へと分散して行く。
この過程で集落とは別のところに巨大なストーンサークルがこの「日時計状組石」を伴って現われてくる.

山内丸山遺跡では、この日時計状配石の周辺にはストーンサークルではなく、多数の土坑墓があり、この墓場並びに墓場を南に貫く「墓の道」のモニュメントのごとくこの日時計状配石が建っている。もっとも　この配石から「墓の道」を南に登って行ったところで、規模は小さいが 7 基の円環状配石墓「ストーンサークル」が道の片側に並んで発見されている。
縄文のストーンサークルに必須の日時計状配石と環状列石とが、ここで揃って出てきている.
この「ひまわり状組石」近傍の「墓の道」の両側には道路に直角に頭を西にした多数の墓が並んでいるという。

日 時 計 状 配 石

西北西は死者と関係する方向?　沈む太陽に向って並んで居るのか? また、この南北の墓の道と太陽や周りの山々との関係は?????この南北の道は「岩木山」が眺められる方向でもある。

3．「墓の道」に並ぶ「ストーンサークル・環状配石墓」

-「縄文のストーンサークルの原型」-

snsnnai3print.htm

「日時計状組石」のところから今は林の中を南北に伸びる「墓の道」
山内丸山遺跡のストーンサークル　環状配石墓は林の中のこの道の傍に並んで見つかりました．
山内丸山遺跡の墓場を南北に貫く「縄文の道」。日時計状組石のところから、この登坂の道を林の中に登って行くと、そこにストーンサークルが有りました．小牧野や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルから較べるとはるかに小さく石の数も少ない．しかし、この環状の配石のまわりからは多数の墓穴が見つかっており、墓であることは間違いない。

山内丸山遺跡の環状配石墓とその中の墓穴 林の中にあるその山内丸山遺跡のストーンサークルに立って見るとあの数十メートルを越える環状の列石とは異なりその規模は小さく、環状配石の環の直径は 4～5 メートル程度。確かに環状に石が配されている事が良く解るが､石の数も少なく　不ぞろいである。
あの日時計状組石があるかどうか　良く解らない．
その時は気がつかなかったが、本に載せられた山内丸山遺跡のストーンサークルの写真を見ると円環に配された組石の中に他の石よりも大きく細長い石が一つあり、これはヤッパリ円環のところに立っていたと想像され、円環と円環の脇に立つ日時計状石の両方がこの環の中に揃っている。でも、少し時代が早いといっても　小牧野遺跡や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルと印象が大きく違う。
圧倒的に石の量が少ない。こんなストーンサークルが「墓の道」の片側に沿って幾つも発見されている。

岡田先生の話によれば、「このストーンサークルは一機につくられたのではないだろう。人がなくなるとここに墓をつくり、石を回りに配する。また次にと次々と墓が作られるに従って石が運ばれ、長い時間を経過してこの環状に配石が作られた。時には古い墓の石を並べかえることもやられたに違いない」と。 山内丸山の人たちは、まだ、このストーンサークルその物には意識しておらず、墓場の墓の配列としか認識していなかったと思う．人を葬るその時々に円環の一部のところに墓をほり、石を積む。長い時を経て、円環が作られていった。
恐らく山内丸山遺跡の人々にとっては、円環に次々人を葬って墓を作って行くことは意識していたとしても、円環そのものには意味を見出していなかったのでは? これで納得。

山内丸山遺跡のような巨大な縄文集落が形成された縄文後期に続く次の時代には、これら巨大集落は小さな集落へと分散して行き、この過程で集落とは別のところに巨大なストーンサークルが「日時計状組石」を伴って現われてくる．
「縄文のストーンサークル」として知られる巨大な環状列石を有する小牧野遺跡・伊勢堂岱遺跡や大湯のストーンサークルなどである。 環状の列石の下には墓穴がない場合もあり、環状列石その物が純粋に墓穴の組石とは考えられない。 つまり　円環そのものに意味があると考えられてる。もっとも　これらストーンサークルの内部や一部周辺から墓穴や甕棺が発掘され、共同墓場としての機能も有している。
「この縄文のストーンサークル　環状列石は何を意味するのか?」は今も謎ではあるが、次のように考えられている。
「かつて同じ祖先を持ち、同じ集落に住んだ人達が、小さな集落に分散して行く過程で，巨大集落の墓場にあった共同墓地「環状列石墓」のストーンサークルを思い出し、集落は分散しても，祖先を同じくする絆として、一同が会する広場・墓場並びに祭式・祭を行なう場所としてこのストーンサークルを集落とは別に作った。
周辺から良く見える川筋の丘陵地を選び，大きな土木工事を行ない整地したところにまわりの山々や太陽の運行など自然と関係ずけて、川から多数の石を運び上げて、環状に組石の列を作り大きなストーンサークルを作った。

山内丸山遺跡に見られる環状配石墓の形が、さしてそこに葬られている祖先への敬愛の念の意識が次の時代にお互いの絆を確かめ合う場のイメージをクリアーにして巨大なストーンサークルをつくっていった。まさに「縄文のストーンサークル」の原型が山内丸山遺跡の環状配石墓・ストーンサークルで見られる。

【　山内丸山遺跡の最も高い場所　】

遺跡の最も高い高台
西の岩木山を望む

遺跡の最も高い高台
ここにも竪穴住居

山内丸山南盛土　集落の中心部

山内丸山遺跡では別々に幾つもあった環状列石墓とひまわり状組石。縄文人の心の支えとして　たえず、環の意識があり、また　祖先と一緒に生活するとの意識がり、集落の中時には中心に墓があった。
争いのないやさしさの象徴が円環であるとも聞く．　縄文の人達が無意識に持っていた円環のイメージが長い年月をかけて　祖先を祭る墓場のストーンサークル　そして墓場の象徴としてあった日時計状列石が円環の傍に添えられた。
それが次の時代　幾つかの集落に分散して行く時に、この円環の墓場を同じ祖先を持つ集団の絆を確かめる場としてよみがえらせ、通の墓場・祭式の広場として、丘を削り、巨大なストーンサークルを一機に作り，年に何度となくここに集まり、祭式をおこなった。
ここに縄文の人達の心の象徴としてはっきりと「ストーンサークル」が意識されていく。

東北芸術工科大の赤坂憲雄氏は「縄文の人達の人間観　しいては日本人の人間観の原点がこのストーンサークルを通して考えられる」という。
山内丸山遺跡の一番高い丘の上にのぼると南に八甲田の峯峰・西に遠く岩木山　東北に下北の峯峰いずれも特徴のある山々がのぞまれ、これら山々に囲まれた台地の林の中に山内丸山の巨大遺跡がみえる。
実に素晴らしい自然に囲まれた土地で人々は争いもなく豊かな縄文の時代を育んで行った。
縄文の文化観を変えたこの場所は同時に縄文人の人間観・精神そして　日本人の考え方の原点を作った遺跡でもある。

2000.11.1.　by M.Nakanishi

4.　山内丸山遺跡　南北に伸びる縄文の「墓の道」

snsnnai4print.htm

山内丸山遺跡　南北に伸びる「墓の道」

西盛土の北の端　竪穴住居に隣接して密集した土坑墓があり、3 基の「日時計状配石」がある。ここから南の丘へ丘を巻きながらの「墓の道」が伸びている。この「墓の道」の片側には 7 基の「環状配石墓」が並んで発見された。 今から約 5000 年前　B.C.3000 縄文中期　山内丸山遺跡が最も栄えた時代である。
この「墓の道」の断面が切り取られているところへ岡田先生の案内で行った。

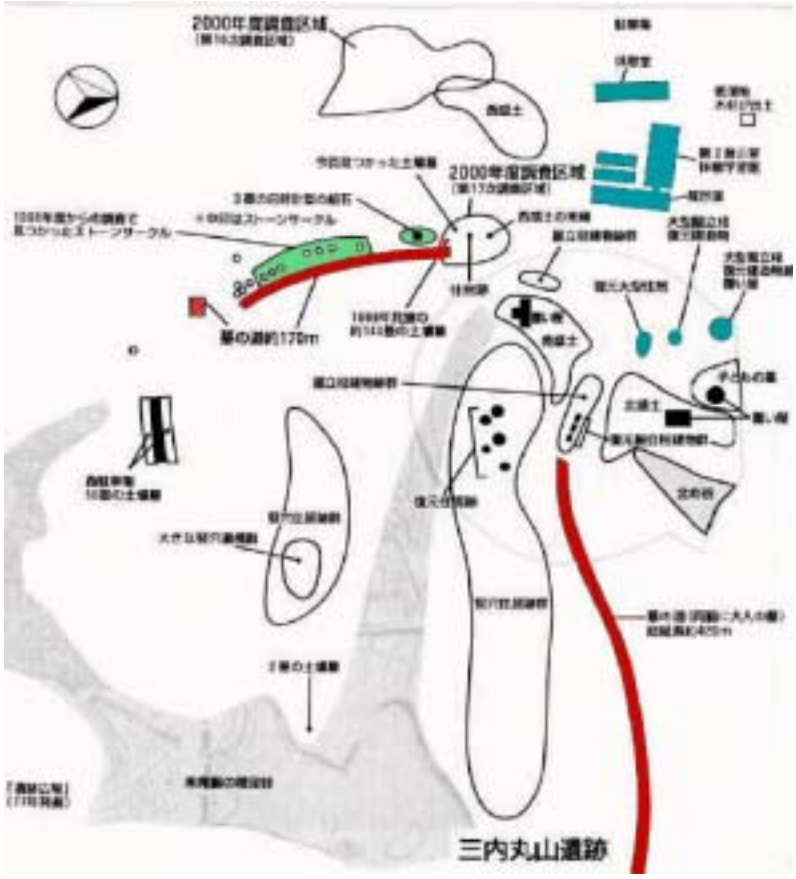
集落の中心から南北に伸びる「墓の道」　断面

「黄土色した縄文の地層」とそれ以後の時代の「真っ黒な地層」とがはっきり区分して見える。 岡田先生の説明によると　道の部分と自然堆積の部分の差の見分け方は次の通りである.

←　道の部分　→｜←縄文時代の表土部
黒い土の下にある黄土色縄文の土【縄文の道断面の拡大】

「「縄文の道」の部分では「黄土色→黒色」の変化がはっきりしているのに対し，自然のままの堆積の場合　両方の土が交じり合うため、「少しぼけた黄色」になる。」と。地層の断面の「黄土色」の部分を追って行くと黒と黄土色の混じったぼけた色の境界部と両者の色が交じり合わず はっきり

「黄土色」した境界をもつ「縄文の道」の部分とに分かれる。
4～5M の巾で自然の地層から少し掘り込んで道が作られている． つまりこの縄文の「墓の道」はまわりよりも低く掘り込んで南北に伸びている。「なぜ道が掘り込んで作られたのか」定かでないが、岡田先生の説では、「掘り込むことで雑草などがはえにくくなったのでは?」といわれている。



山内丸山遺跡では　広い「縄文の道」が集落から東西・南北の二つの方向に伸びていた。
また、この道の傍には墓が点々と作られた「墓の道」であったことが判って来ている。
　東西の道は南北の道にくらべて　少し広く巾 7～10M 程度南北の道は 4～5M 程度でる。また　東西の道には点々と土坑墓が並ぶのに対し，東西の道には傍らに密集して沢山の土坑墓がある所そして日時計状配石　環状配石墓が並び，この 2 本の墓の道では様相が少し異なっている。
山内丸山遺跡ではこの色々なタイプの墓の存在から「もう縄文のこの時代には階級が存在していたのでは?」と岡田先生は考えている．
また、延々と土坑墓続く「墓の道」。
　なんの根拠もないが、この「墓の道」そのものも「ストーンサークル」の環状列石ではないか?
集落からでた東西・南北の 2 本の「墓の道」がぐるっと墓場や居住区を巡り、ひとつにつながるとすれば 「環状につながる墓地　ストーンサ ークル」そのものではないか・・・・・
何となく「墓の道」を考えるとそんな気持ちになってきた。

まだまだ、勉強不足で考えが及ばないが、縄文の丘に立ち、ゆったりとあかねにそまってゆく夕日をながめていると気分壮快　リフレッシュされた気分になってくる。
本当に静かではあるが、いつもパワーを与えてくれる遺跡である。

「縄文のストーンサークル」の原型
山内丸山遺跡の「ストーンサークル」と「墓の道」　探　訪
『完』

縄文のストーンサークル

D.　「伊勢堂岱遺跡のストーンサークル」探訪

秋田県鷹巣町 2000.9.15.

dodaiprint.htm by M.Nakanishi　2000.11.1

米代川の上流　鹿角市大湯のストーンサークルから　少し下ってきた秋田県鷹巣町に大きな「縄文のストーンサークル伊勢堂岱遺跡」が発掘されている。

大湯のストーンサークルの環状列石には墓整然と並んであるのに対し、青森県小牧野遺跡の環状列石では、特徴てきな石組でストーンサークルが構成され、その下には墓がない。これらの中間的な性格を持っているのが伊勢堂岱遺跡のストーンサークルと言われている。

8 月に大湯のストーンサークルに行ったときには行程の調整つかず、行くのをあきらめた遺跡である。

9 月 15 日　青森　山内丸山・小牧野遺跡のストーンサークルを廻るスタートとしてまず、この伊勢堂岱遺跡から訪問する事とした。 前回交通事情に泣いたので今回は飛行機で鷹巣町を訪問し，それから汽車で青森へ出ることとした。

地図を見ると能代市・鷹巣町・大館市の兆度中間の丘陵地に「秋田北空港」があり、この空港からすこし鷹巣の方へ行った丘陵地の端　米代川に隣接して伊勢堂岱遺跡が見える。 この空港開設の取付け道路を作る過程で本遺跡が発見され、発掘頂さが続けられている。

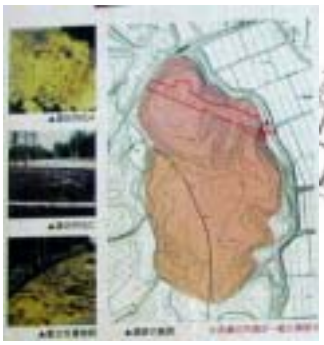
八幡平・秋田駒ケ岳から北へ流れ出た米代川が山間を抜け鹿角で行く手を阻まれ、ここで北からながれてくる川とここで合流して、大きく西に流れをかえる。そして、大館・鷹巣と山間の盆地を縫って能代で日本海に注ぐ。

大湯のストーンサークルはこの米代川が大きく西に流れをかえる鹿角の合流点のすぐ上の丘にあり、今回訪問した伊勢堂岱遺跡はそこから約 40km 西へ下った鷹巣町の外れの丘の上にある。

日本海沿岸にいた縄文人が縄文後期約 4000 年前にこの米代川を遡って内陸に移り住んで行ったに違いない．前回　大湯へ行った時も感じたのですが，山間をぬって流れる米代川はスケールの大きい大河で

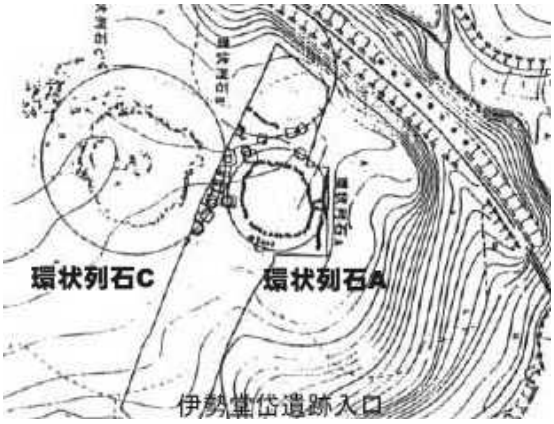
ある。鹿角の盆地といい、鷹巣の盆地といいまわりは山又山。川沿いの台地に集落を構え、森と川の恵みで生活が成立っていた．古代には食料を得る重要な川であると同時に重要な交通路であったろう。米代川にかかる橋から見る伊勢堂岱遺跡は盆地から見ると一番よく見える一等地である．
朝一番の飛行機で秋田北空港へ。正解でした。空港から鷹巣町の方へタクシーで約 15 分のところ。鷹巣の街から米代川を渡った田園地帯　米代川を見下ろす丘陵地の高台に遺跡がありました．
もっとも　遺跡を見学した後、鷹巣の街から青森へ行こうとしましたが、それが全くだめ。汽車午後までバスも全くなし．
鷹巣は昔は秋田内陸の奥の奥と思っていましたが，ヤッパリ今もってダメ。特に青森へは奥羽山脈錠が関の峠を超えねばならず、また盛岡へは十和田・八幡平の山々が壁を作っており、県境の壁の凄さ今もって感じました。東京へ帰る方が近いです。

1．「伊勢堂岱遺跡　ストーンサークル」探　訪



台地の北の端に入口があり、西へ向って　真っ直ぐ丘に登って行く広い幅の道がつけられ、遺跡の丘に登って行く。恐らくこの道が空港から鷹巣へのアクセス道路になる予定だったのだろう。この広い道を昇って行くと平らに整地された広い台地があり，この左右に良く整備された環状列石 A,C がありまた。右側の環状列石 A は 25Mx30M 。左側の環状列石 C は直径 40M。そしてこの列石のまわりには整然と掘立柱建物が整然と並んで発掘されている．

【伊勢堂岱遺跡　環状列石 A&C　遺跡入口側から】



【 伊勢堂岱遺跡　環状列石 A&C　遺跡奥から　】

どちらの遺跡も大量の石で円環が作られているが、石の大きさ形はばらばら。
特に列石 C では大きすぎて環状が把握しにくい。この掘立柱建物跡も同時代の大湯や小牧野遺跡と同じく生活の兆項はみられず、やはり集落は別の場所にあったと考えられています。

環状列石 A

環状列石 C

きっちりと整備され、遺跡の詳細な説明板が建てられており，ゆっくり思うがままに歩く事が出来ました
たこの遺跡のストーンサークルもまわりの森によって視界がさえぎられ，あたかも縄文の森がそのまま再現されているような静けさの中にある．
道具のなかった時代に大規模な土木工事をほどこし、このような環状列石の墓をきずき、集落の人を自

分達の祖先が集っているここに埋葬し、折にふれ、祭を行ない，祖先を同じくする人たちの絆を強くしていたと考えられる。 このストーンサークルを中心とした祖先との絆　集落の人達との絆　それが「縄文の人達の心」を知る大きな手がかりといわれている。
これら　ストーン サークルを作った集落は大湯・小牧野の場合もそしてこの伊勢堂岱遺跡の場合も解明されていない．どこに集落があったのか　非常に興味のある所である。
誰もいない森の中　一人たっているとひょいと宇宙人でもあらわれてくるような錯覚に陥る。

2000.9.15．秋田県　鷹巣町　伊勢堂岱遺跡にて

7.2．縄文のストーン　サークル　探　訪　【完】

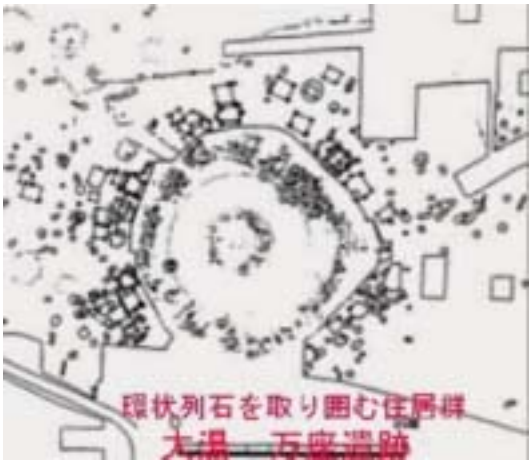
7.3.　『　縄文人の心を映すストーンサークル　』

oyu6.htm by M.Nakanishi

鹿角市　大湯のストーンサークル

そもそも　縄文のストーンサークルとは何なのか…・・
ストーンサークルはこの米代川沿いの海岸段丘の上など東北地方を中心に日本各地で縄文後期の遺跡として発見されている。
昔から多くの説があったが、今はほぼ墓地および墓地を中心とした祭式の場とする説が有力である。
また、縄文人が天体の運行を知っており、ストーンサークルの形態や場所そして日時計状の石組など星や太陽の運行を知っていて、ストンサークルを作ったとも言われている。
数多くのストーンサークルが発掘され，円環の中や石組の下から墓が見つかり，縄文人の暮しと直結した墓場または祭祀の場と考えられている。

赤坂憲雄氏はその講演の中で、「数々の縄文のストーンサークルから、縄文人の心の奥を読み取ることが出来る。それがずっと受け継がれ、日本人の心を形成しているのではないか…・・」と講演。
縄文人の人間観とストーンサークルの形態の変化について、ご自分の研究の結果を解説され、深く感銘を受けた。
縄文人の集落では、ストーンサークルが形成される縄文後期以前から、集落の中心部に広場があり、その広場を中心に同心円状に生活空間が　広がっている．　竪穴式住居が取り囲み,、貯蔵穴やゴミ捨場などがある。墓場もこの同じ,生活場所の中にあり、死者と共に生活をする。

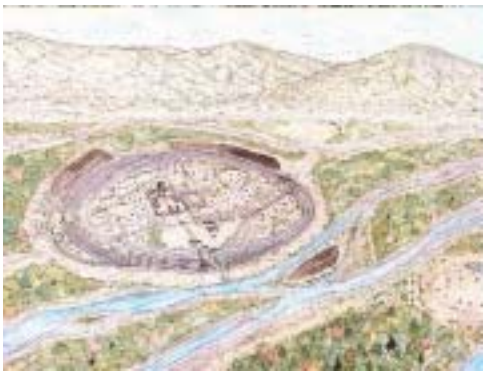
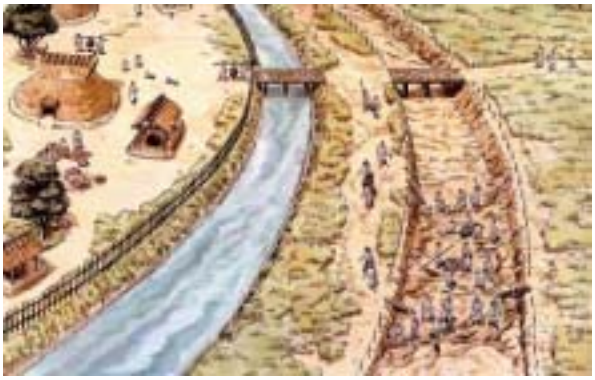


大湯　万座遺跡
ストーンサークルを取り囲む建物群

そして、縄文後期　集落が大きくなってくるとそれらの集落が分化して行く過程でストーンサークルが色々な形態を取って現われてくる。
米代川の河岸段丘にある秋田県伊勢堂岱遺跡やこの大湯万座遺跡などの縄文のストーンサークルではストーンサークルの円環の石組みや内環と外環の間などから墓が発掘されている。
そして、このストーンサークルの周辺部からは円環状に規則的に並んだ竪穴住居あとや土器など多様な遺物が発見されている。 発見された住居跡が生活の場であったかどうかは非常に興味のあるところであるが、現状では生活の痕跡は見つかっていない．死者を弔う祭礼の建物跡と考えられている．
生活の場の中心に墓場が置かれていた時代から　集落分化の時代に集落統合の精神的中心として墓場を持ったストーンサークルが置かれる。
このストーンサークルの広場では分化した集落の人達が集まり弔いの祭や祭礼が祖先の霊と共に行なわれてきたと考えられている..
縄文人の意識・人間観として「先祖・死者に対する敬愛の念」　「定住をはじめた縄文人の仲間意識」がストーンサークルを作り，「誰でも受け入れる争いのすくない穏やかな生活」それがストーンサークルの形になって完成されたのでは・・……と考えたい。

(赤坂氏の講演をそんな風に受け取った。)

一方、　弥生の村村では、環濠で囲まれた生活の場とこの環濠の外に墓場があり、生活の場と墓場とがはっきり区別されており、そこには大きな人間観の差がある。

【環濠で囲まれた弥生の村】

青森小牧野遺跡遺跡でも、生活の場とは異なる場所にストーンサークルが作られている。その場所は二つの川に挟まれた尾根筋の高台を意図的に削って作られている。恐らくは集落からは、何時も墓場を意識出来る場所として選択し土木工事を行なったに違いない。
例えば　集落が大きくなり、分化する時のもう一つの形態として、生活する場所とは別に、そのそれぞれが共に集い、祭祀を行なう共通の場として形成されたものと考えると弥生の墓場の考え方とは大きく異なっている。「生」の世界と「死」の世界の分化がはじまったと考えるにしても、その根本はむしろ大きくなった集落の意識を繋ぐ絆として、また、祖先を弔い祭る墓場と一緒に生活するとの意識の中で、墓は特別な場所として意識の中の村の中心にあったのではないだろうか…
年に何回かこのストーンサークルに人達が集まり，祭祀を一緒に行なった場であったに違いない。
死者に対する「穢れ」のイメージが全く見られないと言われる縄文人の人間観がこの縄文のストーンサークルと自分達の集落の住居配置に結実しているといわれる。
環濠によってはっきりと「生」と「死」の世界を区別し，「死」の世界を「穢れ」と意識した弥生人の人間観とははっきり異なり、したがって、弥生人の生活が始まるとこのストーンサークルも消滅する。
「円環の不思議な魅力」　縄文人の心のふるさとの思いがこのストーンサークルこめられているような気がする。
「争いや穢れの意識のない」縄文人と「戦い・争いが始まり、穢れ・差別の感情が生じてくる」弥生人との間には，気質・人間観の大きな変化がここに生じている。

「日本人のやさしさの秘密がこのストーンサークルにあると考える人は多いし、また、東北に今も残る座敷墓の風習なども同じ流れと理解できるのではないか?」と赤坂憲雄氏は講演された。

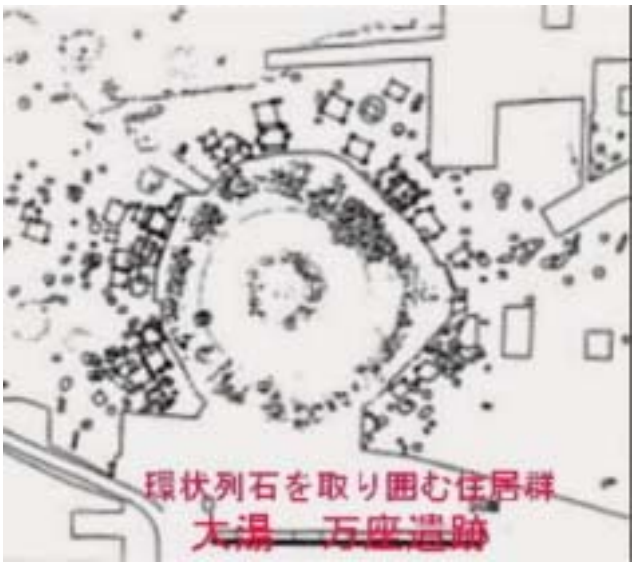
【　縄文のストーンサークルと石組　】

万座遺跡

〔大湯　ストーンサークル〕

野中堂遺跡

【　ストーンサークルの二つのタイプ　】



ストーンサークルを取り囲む竪穴住居群
〔円環の下に墓がある type〕

b．住居跡がない 青森小牧野遺跡
〔円環の下に墓がない type〕

7.4.　岩木山北山麓　津軽の古代製鉄地帯

鬼伝説の里から　縄文人へ

oyuprint.htm

東北の縄文人が作ったストーン　サークル。　祖先を敬い自分達の村の絆の中心にあったストーン　サークル。 このストーンサークルが多数ある東北　秋田・津軽は次の時代『産鉄の民』のふるさと。
縄文から弥生へ。　ストーン　サークルを作った縄文の民と鉄を持ち込んだ弥生の民との出会い　そして紛争。そんな中から　各地に残る産鉄の民の『鬼伝説』。

縄文の民は『穢れを知らない争いのないやさしい民』。一方　各地に残る多くの鬼伝説の中で　津軽の鬼伝説は農耕の民やその土地の民と交流をもつ『心やさしい鬼』。
縄文から弥生への移行の中で　脈々と続く『日本人の心・日本人の精神的支柱』がこの土地で　鉄を媒介に醸成されていったのではないだろうか・・・・・
人っ子一人いない静かな森の中　ストーン　サークルの中に立つと不思議に岩木山北山麓の『鬼のふるさと』が思われてならなかった。

弘前から鰺ヶ沢にかけて岩木山北山麓の幾重もの沢筋は古代の大製鉄地帯であり、『津軽の鬼伝説の里』と重なる。
弘前市鬼沢・鬼神社」「弘前市赤倉・岩木山赤倉口」「弘前市十腰内・巌鬼山神社」「鰺ヶ沢市湯舟・湯舟神社と杢沢製鉄遺跡」などである。
前の晩に「弘前ねぶた」を見学したが、真っ暗な中で笛と太鼓のリズムにあわせ躍動する「ねぶた絵」の迫力はその色とあいまって、灼熱の鉄のイメージがぴったり。
思っても見なかった「鬼沢のねぷた」に何の根拠もないが、古代渡来人がこの津軽の地で起こした製鉄の祭と重ね合わせていた。まだ、朝もやの中にあるこの岩木山北山麓の沢筋の村村を訪ね昔に思いを馳せた。
何処からこの製鉄の民はやって来たのか　また　この地の鬼伝説が通常の「悪い鬼」ばかりでなく民を助ける「良い鬼」の伝承をしているのは　津軽に住んできた人達のやさしさか……。
だとしたら　それはこの地が早くから「争いのない排他性を持ち合わせぬ」縄文人が開いてきた土地だからだろうか・・……。
原生林の中、誰もいない巌鬼山神社に一人立ちそんな事を考えていた。

「縄文人の系譜が連なる産鉄の民」東北にそれを感じている。
岩木山の北山麓鬼伝説の郷　何処までも続くリンゴ林の中の一本道を弘前へひきかえした。
今回の東北 walking の締めくくりは　秋田鹿角「大湯の縄文のストーンサークル」探訪。　ねぷたが飾られた弘前駅を鹿角花輪へ向かった。

【秋田・青森 縄文 の ストーンサークル　探　訪 】

【完】